

ひょうきんなイボイノシシ

アニマルフォトグラファー
トラベルライター

平 岩 雅 代

イボイノシシはその名前が示す通り、顔に大きな突起(イボ)があるユニークな野生動物です。英語名を“ワート・ホッグ”。でもどこことなく憎めない愛嬌のあるトボけた表情から、親しみを込めて“イボちゃん”と呼ぶほうが、ピッタリのような気がします。

イボイノシシの生息地は、東アフリカ以南のアフリカ大陸で、おもにサバンナ(草原)です。

ウォルト・ディズニーが映画化し、目下アメリカと日本で絶賛上映中のミュージカル『ライオン・キング』の中にも、イボイノシシが重要な脇役として登場します。

主人公の子ライオン“シンパ”が、父の死の原因は自分の行動にあったと責任を感じ、家出した時に出会うのが、楽天的でおどけた三枚目のイボイノシシ“ブンパ”です。最初はイボイノシシのことを「ヘンなヤツ」という目で見ていた“シンパ”ですが、次第に励まされ、友情を育んでいく様子は実にほほえましいものでした。

改めてイボイノシシの顔を正面からよく見ますと、目のすぐ下と頬の脇の両側に、それぞれ大きなイボがあることがわかります。

アフリカに暮らすイノシシの仲間は、森



写真1 目と頬の脇にある大きなイボが特徴

林地帯をなわ張りにするモリイノシシ(ジャイアント・フォレスト・ホッグ)、水辺を好むカワイノシシ(ブッシュ・ビッグ)、そして草原に住むイボイノシシの3種類ですが、その中でも最も出会う機会が多いのが、イボイノシシです。

子どもにはイボがありませんが、おとなになりますと上に向かってカーブした立派な牙も生え、なかなか強そうな凄みのきいた顔に変わります。ところがこの顔に似合わず、臆病な一面も持ち合わせており、相手



写真2 親も子ども食べるのに忙しい

に自分から向かっていくことなど、とんでもない!といった感じで「あぶない」と察知するや否や長く細い尻尾をアンテナのようにぴーンと真上に立て、足早に逃げ出します。しばらく走って立ち止まり「大丈夫かな?」といった顔で振り返り、「まだまだ…」と思うと再び尻尾を立てて「トコ、トコ……」と走ります。その姿が何ともおかしく、また可愛いらしくてたまりません。

イボイノシシは草や木の実を食べます。ところが首が短いため、立ったままで下を向いても、口が地面に届きません。そこで前肢を折り曲げ、“おじぎ”をするような姿勢をとり、そのまま草を食べながら前に進みます。その姿はまるで電気掃除機のように…。ほんとうに変わっています。

イボイノシシのマイホームは地面に掘った穴の中。小さい子どもたちは穴の奥深くに潜って身を守ります。

家族の絆は強く、子どもたちは両親のすぐそばにいます。親に比べて身体も細く、顔のイボも目立たない子どもたちですが、逃げる時に尻尾をぴーンと立てて走るポーズは、そっくり親ゆずりです。

必死に逃げるイボイノシシはちょっと気の毒な感じもしますが、親と同じく同じポーズで、あとをつけてゆく姿には、笑いを誘われてしまいます。

イボイノシシが特に多いのは、フラミンゴで有名なケニアのナクル湖畔や、木登りライオンで知られるタンザニアのマニヤラ湖畔などです。

イボイノシシの家族単位は平均 5~6 頭。両親と 3~4 頭の子どもたちです。母親の乳頭は 4 つあり、4 つ子までなら一度に授乳できる計算です。じっとしていない子どもたちを脇に、食事に忙しい親たちは時々チラリと様子を見てはまたモグモグ……。子育てはどこの世界でも大変なようですね。

イボイノシシは決して目立つ存在ではありませんが、何故か気になる動物。顔を見ると思わずほほえんでしまわずにはいられないような、心をなごませてくれる不思議な動物なのです。

〈イボイノシシひとくちメモ〉

▶東アフリカ（ケニア、タンザニア、ウガンダ）各国で公用語として話されているスワヒリ語で、イボイノシシのことを“ンギリ”と呼んでいる。

▶野生のイボイノシシの妊娠期間は、180日前後。生後1週間で生まれた子は巣穴から外へ出る。通常イボイノシシの寿命は、10数年といわれている。